ー探求・川にちなんだ万葉集の歌ー

万葉の川心 第15回

川崎市立木月小学校教諭　舩田　園子

川を詠む

佐檜の隈

檜の隈川の瀬を早み君が手取らば言寄せむかも

（巻第七　一一〇九番歌）

大きな背中を見失わないように冬の街を歩いている。
どうして同じ速さで歩いてはくれないのだろう。
いつも、さっさと前を歩いていく。
ぴったりと寄り添った幼い恋人達をじゃまくさそうによけながら。
黒い厚手のコートを着て私の前を行くこの人は、
まるで…大きなくまさんのよう。
「たまには、ゆっくりと歩きましょうよ。」
そう言って、あの人の手を取ったら、なんて言うだろう。
小走りに追いついたけれど、きっかけがつかめない。
「どうした。」という声に
「ううん。」と答えた。

万葉集の巻七には「川を詠む」と題して、一一〇〇番歌から一一一五番歌まで十六首がおさめられている。その中の一首、檜隈川は高取山に発し、北流して曽我川に入る。佐檜の隈の「佐」は接頭語であるが、ヒノクマは奈良県高市郡明日香村檜前の地である。

「佐檜の隈を流れる、檜の隈川の渡り瀬の流れが早いからと、あなたの手を取って渡ったら、人々が噂を立てるでしょうね。」これは女性の歌である。「言寄す」とは、噂を立てるの意味であるが、好きな人と言寄せられることは、困るような、うれしいような気持ちであろう。佐檜の隈を流れる檜の隈川の渡り瀬が早いのをよいことに、あなたの手をつかんだら、噂を立てられるだろうか-恋をした乙女がささいなことをきっかけに想う人の手を取ろうとするのはとてもかわいらしい。他にも「言寄す」には、「言葉で助力する。加護する。」という意味もあり、この国では昔から、言葉に何かしらの力や魂を感じていた。檜の隈の地に住む民によって詠まれ、愛されたこの歌は、もちろん労働のときにもみんなで歌い合ったであろう。ひやかしながら、つつきながら、うらやましさもまざって、言寄せて、みんなで恋を盛り上げる。そんな暖かさが、この歌から伝わってくる。

この川の歌に、もう一首、巻十二の三〇九七番歌がある。

佐檜の隈檜の隈川に馬駐め　馬に水飲へわれ外に見む

せめてもの間、檜の隈川に馬を止めて水を飲ませてください。お帰りになるあなたの姿を遠くからでも見ていますから。

生活の中から生まれる歌の、素朴さや、人の良さは、時代を越えて、伝わってくる。今も昔も変わらない何かを感じさせてくれる。

川の流れが、万葉の昔からずっと続いているように。
恋する心が、万葉の昔からずっと変わらないように。

老夫婦とすれちがう。
二人は手をしっかりつないでいる。
もう、長いこと、そうしてきたというように、
とても自然に。
そういえば、じいちゃんは、いつもばあちゃんを
自転車の後ろに乗せて走っていたっけ。
「あんな風に、年をとりたいね。」
そう言いながら、あの人の手を取ってみた。

冬が来た。
空気が澄んで、
本当の人の暖かさが分かる季節だ。

明日香村を流れる檜隈川

於美阿志神社（檜隈寺跡）